

# 百年戦争の予想

昭和16年5月14日 関西経済倶楽部

昭和16年5月14日 神戸経済倶楽部

昭和16年5月20日 中部経済倶楽部

東洋経済新報社社長 石橋 湛山

今回の夏季特別企画は昭和16年（1941年）5月に石橋湛山が行った講演の採録です。当時は欧州大戦が開始されて一年半ほど経過し、前年9月に日独伊三国同盟を結んだ日本に対してはA B C D包囲網が形成されようとしている時期です。時あたかも今年はロシアによるウクライナへの軍事侵攻という過去の大戦を想起させるような戦争が起こっています。その意味で、石橋湛山の第二次大戦に対する現代にも通じる独自の視座を読み直してみたいと思います。

（用語は一部を現在の表記に変えています）

## 一、戦局はますます深刻化

英独戦争は、今や形容の言葉もない深刻な情景を呈しています。これが今後いかなる経過を辿り、いかに結末致しますか。ドイツはただ今連戦連勝の成功を収めています。しかし英国もまだまだ容易に屈伏しそうな様子もありません。

米国は果たして参戦するか、どうか。これは、大分永く問題にされておりますが、最近の様子は、御承知のごとくだんだん参戦の気分が強くなって参りまして、事実上既に参戦しているのと同様の状態であります。陸兵を欧州に送っていないだけで、海軍はもはやある程度戦争に使っていると申してもよろしい。いつかも申した

通り、ドイツ——枢軸側が、もし米国をもって、既に参戦せるものなり、と判定致すなら、米国も多分これを否定しないだろうと思います。ただ私の想像では、枢軸側は、まだ米国を正面の敵とすることを好んでいない。そこで我慢に我慢を重ねて、米国のこの傍若無人の態度を寛恕しているのであると存じます。また米国も、枢軸側から参戦だといわれたい限りは、国内の関係もあり、自ら進んで参戦だと称する必要もないので、現状のごとき変態的参戦を致しているのでありましょう。しかし形勢は、結局この戦争は独米戦争にまで発展しなければ収まらないのではないかと感じます。

こういうわけですから、この戦争は、なかなか片がつきません。独英戦争だけで済めば、あ